

テーマ

紙幣と小説は、実は似ている？

適用分野

アメリカ文学、アメリカ文学史、紙幣論、受容理論、テキスト解釈、芸術論

研究名称

アメリカ紙幣制度の変遷と同時代アメリカ小説における想像力の相互関係

氏名所属

秋元孝文 教授  
文学部 英語英米文学科

内容

### ●特徴

紙幣と文学作品はともに紙に印刷された文字であり、物質的価値は持たない。ところが実際には価値ある物とみなされており、その価値が現前するのはそれらが適切に「読まれた」ときである。適切に読むことができない者は文学の価値を発見しえず、紙幣においては偽札をつかまされる。文化的、あるいは文字通りの意味でも *literacy* を必要とするのである。

アメリカは西洋世界ではじめて紙幣が流通した場所であり、植民地から、独立、南北戦争、といった政治体制の変化を経たためにその紙幣制度も常に変遷してきた。政府ではなく各銀行が自由に紙幣を発行した時代はとくに、各紙幣が場所によっては額面以下にしか受け取ってもらえなかったとか、あるいは南北戦争当時には流通していた紙幣の60%が偽札であった等、紙幣の価値は現在のように所与のものとはみなされず、むしろ怪しげなものであった。こうして紙幣の自明性を疑い、歴史化してみることによって、ともにフィクションである紙幣制度の変遷と文学作品の傾向との間に見られるであろう類似性を探り、その相互関係を考察するのが本研究の目的である。

### ●研究内容

アメリカの現代アーティストJSG Boggsは紙幣を作品の題材とするだけでなく、紙幣の持つ流過程さえ作品内に取り込む。もともと物質的価値のなかったものが価値を持つのが芸術であるが、Boggsの作品は、芸術作品の価値に不確かな根拠しかないという事実だけでなく、紙幣という資本主義経済においては絶対的な価値を付与された媒体の虚構性さえも巧妙に暴いてみせる。彼の先駆者ともいべきMarcel Duchampの「泉」をはじめとするレディメイドの作品が暴露して見せたように、芸術作品はそこにこめられた作家の才能・技巧とは無関係

に、コンテキストによって芸術になったり、あるいは鑑賞者の内部に起こる作用によって芸術になりうる。そのようすは文学研究でWolfgang Iserらの受容理論が明らかにしてきたものと重なる。作品は読まれることによってはじめて意味を生じる。

そう考えると、紙幣と文学作品には多くの共通点があることに気づく。ともに紙に印刷された文字であり、物質的価値は持たない。ところが実際にはともに価値ある物とみなされており、その価値が現前するのはそれらが適切に「読まれた」ときである。価値を発見するためには*literacy*を必要とするのである。こうして、紙幣もまたテキストである、という認識にいたったとき、当該研究の発想は生まれた。

具体的にはまず、アメリカ紙幣の父がアメリカ文学の父でもあるBenjamin Franklinであり、その「印刷屋的想像力」が双方の源となったこと、さらにFranklinが紙幣というテキストを作るのみならずそれに対する「解釈共同体」さえ作りえたこと、そこからFranklin的Time is Moneyの発想が生まれ、時間と共に増殖していく貨幣の仕組みを現代のグローバル化の流れと結び付けた。それに対抗する地域通貨という発想に、実際にカンザス州の地域通貨に肖像が載ったWilliam Burroughsの思想を重ね、グローバル化に対するオルタナティブの可能性を探った。次に19世紀の少年小説Ragged Dickが当時の読者に正直、勤勉、節制という内面的向上を促しながらも、実際にはDickの出世はその外見に大きく左右されており、それは当時の紙幣が数千にも上る銀行によって発行され多数の偽札が出回り、紙幣に関する*literacy*が要求されたように、外見に重点が置かれていたという点で重なるものだということ論じた。そのほか今後はMark Twain, Faulkner, Auster, Gaddisなどの様々な作品を取り上げていく予定だが、同時にアートにも通じる真贋の問題、オリジナルとコピーの問題、貨幣とは何かという問題にも踏みこんでいく。

キーワード

アメリカ紙幣、Benjamin Franklin, JSG Boggs, 貨幣論、literacy, アートとしての紙幣、アートと価値、真贋、コピー、フィクション

連携方法

■ 講演 ■ 研修 ■ 研究相談 ■ 学術調査 ■ コメント ■ 共同研究